

# 学院長に就任して

学校法人 追手門学院 学院長 竜田 邦明



追手門学院の新しい学院長に選任され、名誉とともに、大きな責任を感じております。学院の幼稚園、小学校、中学校、高校、大学の教職員がオール追手門の旗の下、協力して社会に貢献できるように努めて参る所存であります。

追手門学院の教育理念は、言うまでもなく、独立心を涵養し個を高め、社会の財産となる「人財」を輩出することであり、本学院の小・中・高を卒業し、その理念の下で育ってきた初の学院長として、今一度「独立自強・社会有為」に立ち返って、皆様と追手門

学院のありかたを考えてみる良い機会をいただいたと感謝しております。

私のすべては追手門学院から始まりました。小学校の赤いネクタイの制服、中学・高校の蛇腹のついた制服など、追手門学院を一人で背負っていると勘違いして胸を張っていた、あの頃を思い出します。皆が追手門学院に誇りを持っていた時代でした。その良き時代を受け継ぎ、さらに発展させていくように、微力ながら全力を尽くす覚悟であります。

## 「建学の精神と自校教育」

最近、多くの学校で自校教育が始まっておりますが、これは主に偏った学校選びの弊害、すなわち学校の本質を見ないで見かけの数字だけで学校を選んだことにより、愛校心が欠如してきたためであると思われまふ。

しかし、これは愛校心だけの問題ではなく、両親、家族への愛情が薄れていることも意味します。愛校心には、右も左も分からない時から育ててくれた学び舎や先生への尊敬の念が根底にあります。その恩師や学友は最も厳しい批評家であると同時に、いつまでも味方でいてくれる人達です。ここにこそ、学校と校友会の存在意義があります。

本学院でも建学の精神を再認識し、もっと一般にも知らしめる必要があります。私立学校の存在理由は単に教育や研究のためだけではありません。それなら、国公立でも充分でしょう。私学の私学たる所以は、確固たる建学の精神を体得させ、志を育てることにあります。すなわち「志立」学校であり、我々の使命はその建学の精神を継承し、将来に手渡すことでもあります。私も含め教職員が、学生生徒たちに、その志をきっちりと教えて自由な発想を促し、独自の道を歩むための基礎固めをさせることが大切であると考えます。ピラミッドも大阪城も上からは作れないのですから。

## 「多様な選択肢と差別化」

学校では学生生徒に多くの選択肢を与え、各人の人格形成とスキル向上に資する必要がありますが、幸い教職員の数だけ選択肢があるので、我々が生き様をさらして彼らと向き合うことにより、人生の生き方とものの考え方の基軸を学ばせることができます。さらに、卒業生の人脈を活用すると、その選択肢は膨大な数になります。また、これらの選択肢を有効に組み合わせると、本学院の特徴を強調でき他校との差別化がさらに強烈なものになるでしょう。たとえば、追手門学院は、昔から学力以外にも演劇やスポーツにおいても

定評があったように、何か新しい価値を創出することができます。

今は逆風の中にあるとか、不況であるとか、これはいつの時代にも通じることであります。それでは好機が来るまで待つのか、それでは何も解決しません。待つよりも、失敗を恐れず打って出た方がよいのではないかと考えます。大阪の良き伝統の一つに、「一回やってみなはれ」というのがあります。「何もしないリスク」より「何かするリスク」を選ぶのが追手門学院の姿勢であり、その精神が大切であると信じています。

## 「卒業生と人脈」

追手門の120年強の歴史は、いかなる苦難をも乗り越えてきた歴史であり、必要とされてきた歴史でもあります。中学・高校が創立60周年を、大学も45周年を迎えようとしておりますが、この数字のもつ意義は非常に大きいといえます。なぜなら、卒業生のほとんど全員が今も現役として第一線で活躍していることを意味するからです。さらに、幼稚園と小学校の卒業生を含めると膨大な数の人脈が躍動していることに気づきます。新しい時代を切り拓き、未来を創っていくために、我々はもっと力のある個人を育てていかねばならないのですから、卒業生の皆様の知恵とネットワークを活用することは、追手門学院がさらに前進するためのパワーになります。学校も、個人も、そこにとどまるためだけでも全力を必要とし

ます。ましてや、成長し続けるには多くの支援が必要になります。幸い、追手門学院の場合には、愛校心あふれる校友会山桜会や大学校友会などの大きな協力があり、保護者の支援もあります。この熱意に呼応して、教職員が、なお一層愛校心を高めてくれると期待しております。

学内外のオール追手門が一致団結して、学院の伝統と歴史を発展させれば、追手門学院が校歌にあるように栄える学院として、さらに強固なものになると確信しております。

改めて、オール追手門の一層の結束とご支援をお願いする次第であります。